

心理学・社会福祉学への期待と 心理職・福祉職のイメージの構造

——高校生とその保護者を対象とした検討——

神庭 直子・河合 美子・松田チャップマン 与理子
山口 一・石川 利江

キーワード：学問への期待、職業イメージ、進路選択、心理学教育、社会福祉教育

問題と目的

近年、日本では社会的に「心の健康」が注目され、心の健康支援にたずさわる対人援助職として、心理職では臨床心理士や公認心理師、福祉職ではメンタルヘルス領域のソーシャルワーカー（精神保健福祉士）等への関心と社会的ニーズの増大が認められる。しかし、高校生・大学生が進路を選択する際、心理職と福祉職の業務内容、各々の専門領域の学習内容、両職種の差異などについて理解することは困難と考えられる。

大学における専門職教育と学生支援の観点からは、学生の進路選択の過程を把握し、その背景にある要因を検討することが必要と考えられる。また、入学前の高校生やその保護者が心理職や福祉職、また心理学や社会福祉学に対してどのようなイメージを持っているか、どのような価値観や態度が対人援助職への指向性に結びつくのかを検討することが、重要な意義を持つと考えられる。

心理学に対するイメージや期待に関する先行研究は複数あるが（例えば、岩崎・大橋・皆川，2012；谷口（藤本）・金綱，2012）、これらの研究の多くは大学生で既に心理学を専攻している大学生を対象としたものである（林・村上・三沢，2018；林・村上・三沢，2019）。心理学に対するイメージについて高校生と大学生を対象として調査を行った林他（2018）は、高校生と大学生の結果を比較した上で、高校生は自分や他人の性格や考え方がわかるようになるといった「自己理解」や「他者理解」に対する期待が比較的高く、「社会貢献」や「論理的思考力」などが低いことを報告し、心理学に興味関心を抱く生徒の期待観と心理学の実態にミスマッチが存在する可能性を指摘している。このことは大学入学後の学生における学生生活への適応や学習上の問題に発展する可能性があると同時に、林他（2018）の指摘のように、実際には関心が実態にマッチしているにもかかわらず誤ったイメージを抱いているために心理学への関心を示さない高校生もいる可能性が考え

られ、心理学の有用性を早い時期から多角的に情報発信していくことが重要である(林他, 2018)。一方、社会福祉学のイメージに関しては国内論文検索データベース CiNii Articles を用いて「社会福祉学」と「イメージ(または期待)」をタイトルに含む論文を検索すると31件がヒットするが、大学生や高校生に対して社会福祉学のイメージや期待を調査した論文は見られなかった。そこで本研究では高校生を対象とし、心理学と社会福祉学という近接領域を相互に比較しながら、学問への期待を明らかにすることを目的とする。

また、大学卒業後にどのような職業に就きたいかという希望は、高校生の進路選択に大きな影響を及ぼすものと推察される。心理職のイメージを検討した先行研究には、スクールカウンセラーのイメージを高校生と大学生を対象にSD法を用いて検討した研究や(植田・丹野, 2007)、臨床心理士のイメージと相談したいと思う程度の関連について大学生・大学院生・専門学校生を対象に検討した研究(才口・谷井, 2010)がある。これらの研究ではひとつの職業や資格のイメージを検討しており、心理職全体のイメージの検討ではない。本研究では、まずは心理職全体の職業イメージについて、他職種に関する先行研究も参考としながら新たに検討を行うこととする。また、福祉職のイメージに関する先行研究としては、大学生を対象として社会福祉従事者のイメージを検討した研究(坂井・坂野・河野, 2008)や、兵庫県の高中生を対象とした大規模調査により福祉職のイメージを尋ねた研究(石川・大和・胡, 2018)があるが、それぞれSD法を用いた検討や項目レベルでの分析となっており、職業のイメージの一面を捉えるにとどまっていると考えられる。そこで、本研究では、心理職と福祉職で共通の項目を使用し、2つの近接領域の職業イメージの構造を検討し、共通点・相違点を明らかにしたいと考える。

最後に、進学を希望する高校生の進路選択にとって、保護者の影響力は無視できない。一般社団法人全国高等学校PTA連合会とリクルートマーケティングパートナーズによる「第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査2019」によれば、高校2年生の時点で卒業後の進路について保護者と話している高校生は81.8%であり、希望進路別にみると、進学希望者全体(84.7%)は就職希望者(68.3%)よりも高い割合で進路に関して保護者と話をしていることが報告されている。また、話す内容としては高校卒業後の具体的な進路についてが最も多く65.5%、次いで、将来どんな職業に就きたいかが54.4%であった(一般社団法人全国高等学校PTA連合会・リクルートマーケティングパートナーズ, 2020)。具体的な大学や学部の選択や、将来の職業は、進路選択における親子コミュニケーションの重要な話題となっていることが推察される。そこで、本研究では、高校生の保護者も対象とし、高校生と同様に、学問への期待と職業のイメージについて検討を行いたいと考える。

以上の通り、本研究では、高校生とその保護者における心理学や社会福祉学への期待、また心理職や福祉職に対するイメージの因子構造を検討し、学問領域や職業がどのように捉えられているかを探索的に検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象者と調査手続き

高校生と、高校生の子どもを持つ保護者を対象に、全国に465万人のアンケートモニターを保有するインターネット調査会社に調査を依頼した。高校生と保護者は親子でマッチングされたものではなく、それぞれ別のサンプルであった。調査回答の質の向上を試みるため、増田・坂上・森井(2019)の手続きを参考として「冒頭宣誓」の手続きを取り入れた。これは、回答者に調査票への回答前に、真面目に回答すると宣誓してもらうものである。また、1つの設問に対してすべて同じ回答をした回答者の除外(ストレートラインカット)と、回答時間が4分未満の短時間回答者の除外により、それぞれ300名の回答を得た。

2. 調査時期

調査は2020年2月中旬に実施した。

3. 調査内容

(1) 高校生に対する調査内容

①属性

高校生に対しては、学年、性別、学科、高校卒業後に希望する進路、進路選択に関する相談先と情報源、同居している家族について尋ねた。保護者に対しては、年齢、性別、最終学歴、心理学・社会福祉学の学習経験、同居している家族、高校生の子どもに希望する最終学歴について尋ねた。

②心理学・社会福祉学への期待(高校生・保護者)

学問のイメージを測定する観点は複数あるが、本研究では、学問への期待として「その学問を学ぶとできるようになると思うこと」を尋ねた。心理学への期待を測定する項目である「心理学を学ぶとできるようになると思うこと」(吉本・長谷川・首藤・山本・川島・小島, 2017)を一部変更し、16項目を作成した。社会福祉学に関しては、吉本他(2017)の「カウンセリング」と「人づきあい」の因子に負荷する多くの項目は心理学と共通すると考えられたため、修正せずに援用した。また、吉本他(2017)の「専門的な人間理解」と「心理的洞察」は、社会福祉学への期待としては適切ではないと考えられたため、一部の文言の変更や、新規の項目作成を行い、全16項目とした。項目の作成は、心理学や精神保健福祉学の教育に携わる研究者5名で行った。回答は、それぞれの学問を学ぶとできるようになると思うことについて「1=そう思わない」から「5=そう思う」の5件法とした。

③心理職・福祉職のイメージ(高校生・保護者)

職業のイメージを測定する質問項目として、伊原・三保(2014)で薬剤師やカウンセ

ラーなど複数の職業に対する価値観の測定に用いられた「職業価値観」の25項目、および石川他(2018)で福祉の仕事のイメージを測定するために用いられた項目から心理職にも適用できる5項目を選択して一部の文言を修正し、合計30項目とした。心理職と福祉職で共通の項目とし、それぞれの職業に対するイメージを「1=まったくあてはまらない」から「6=非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

なお、調査では上記以外の質問項目も使用したが、その結果については本稿では報告しない。

4. 倫理的配慮

調査は無記名であり、調査協力に同意する場合のみ回答画面に入ることが可能となる形式をとった。回答データの記録されたファイルは研究者のみが閲覧できる状況で管理した。本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結果

1. 調査回答者の属性

高校生300名から回答を得た。在籍する高校の教育課程の分類別人数は、全日制250名(83.3%)、定時制14名(4.7%)、通信制36名(12.0%)であり、学年の内訳は1年生71名(23.7%)、2年生105名(35.0%)、3年生124名(41.3%)であった。定時制および通信制の4年生以上の生徒はいなかった。性別の内訳は、男性145名(48.3%)、女性149名(49.7%)、それ以外2名(0.7%)、答えたくない4名(1.3%)であった。回答者の年齢は15歳から24歳であり、平均年齢は17.08歳($SD=0.91$)であった。

高校卒業後に希望する進路としては、大学進学が最も多く188名(62.7%)、次いで就職が49名(16.3%)、専門学校進学が38名(12.7%)、短期大学進学が11名(3.7%)、その他14名(4.7%)であった。

保護者300名(男性150名(50.0%)、女性150名(50.0%))については、36歳から69歳の高校生の子どもをもつ保護者から回答が得られ、平均年齢は49.15歳($SD=4.92$)であった。保護者の最終学歴は大学卒業が最も多く129名(43.0%)であり、次いで高校卒業が78名(26.0%)、専門学校卒業が40名(13.3%)、短期大学卒業が35名(11.7%)、大学院修了が12名(4.0%)、その他が6名(2.0%)であった。

子どもに希望する最終学歴としては大学卒業が最も多く183名(61.0%)、次いで子どもの希望によるとするものが39名(13.0%)、高校卒業が28名(9.3%)、専門学校卒業が26名(8.7%)、大学院修了が15名(5.0%)、短期大学卒業が6名(2.0%)、その他が3名(1.0%)であった。

2. 高校生における心理学・社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージの構造

高校生における心理学と社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージの構造を検討するために、探索的因子分析を行った。いくつかの項目で得点分布の偏りが見られたが、いずれの項目も、学問への期待や職業のイメージを把握する上で重要な内容が含まれていると判断し、すべての項目を以降の分析の対象とした。

心理学と社会福祉学への期待に関するそれぞれの項目群に対して、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、心理学への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 7.943, 1.119, 1.049, 0.885, 0.735 \dots$ であり、Kaiser-Guttman 基準、固有値の減衰状況、および因子の解釈可能性から3因子構造が妥当であると考えられた。社会福祉学への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 7.867, 1.353, 0.976, 0.817, 0.638 \dots$ であり、Kaiser-Guttman 基準、固有値の減衰状況、および因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると考えられた。

因子負荷量の基準を絶対値 .400 とし、因子負荷量が基準に満たない項目および複数の項目に高い負荷量を示す項目を分析から除外し、因子数を指定した因子分析を繰り返し行った。

その結果、心理学への期待の第I因子は「人の心のケアができる」、「人の心を理解し、アドバイスをすることができる」、といったように、心のケアや心の理解に関する項目が高い負荷量を示した。これらは吉本他（2017）の研究における「カウンセリング」と「専門的な人間理解」に含まれていた項目群であり、本研究では「心の理解とケア」と命名した。第II因子は、吉本他（2017）の「心理的洞察」を構成する項目が多く含まれており、本研究でも「心理的洞察」と命名した。第III因子は、コミュニケーションに関わる2項目が高い負荷量を示した。この2項目は吉本他（2017）の「人づきあい」を構成する項目であるが、先行研究ではコミュニケーションも含め人づきあいに関する項目群が負荷していることに対し、本研究ではコミュニケーションに関する2項目から構成される因子であったため、「コミュニケーション」と命名した。各因子の α 係数は、第I因子で $\alpha = .913$ 、第II因子で $\alpha = .816$ 、第III因子で $\alpha = .614$ であった (Table1)。

社会福祉学への期待の第I因子には、「子どもや高齢者に優しく接する」、「障害者を差別しない」、「弱い人の味方になれる」、「ボランティア活動で役に立つ」など、社会的弱者とされる人への支援や社会貢献に関する項目群が負荷しており、「弱者支援と社会貢献」と命名した。第II因子は、「カウンセリングができるようになる」、「人間を深く知ることができる」といった項目が高い負荷量を示していた。心理学への期待の第I因子と類似しているが、社会福祉学の専門性を反映した因子名として、本研究では「人間理解と相談」と命名した。各因子の α 係数は、第I因子で $\alpha = .916$ 、第II因子で $\alpha = .837$ であった (Table2)。

心理職と福祉職に対するイメージについても、それぞれの項目群に対して、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、心理職のイメージにおいては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 9.247, 3.949, 1.689, 1.233, 1.026, 0.877 \dots$ で

Table1 心理学への期待の因子分析結果 (高校生) (N = 300)

質問項目	I	II	III	共通性
第I因子 心の理解とケア ($\alpha=.913$)				
人の心のケアができる	.930	-.196	.086	.718
人の心を理解し、アドバイスをすることができる	.793	.151	-.104	.717
カウンセリングができるようになる	.787	-.005	.001	.615
教育場面で役に立つ	.749	-.081	.019	.493
他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる	.649	.330	-.153	.687
人の悩みを解決することができる	.526	.095	.219	.580
人間を深く知ることができる	.488	.299	.010	.555
第II因子 心理的洞察 ($\alpha=.816$)				
人の考えていることが読めるようになる	.017	.865	-.224	.578
次に相手がどう行動するかがわかるようになる	-.120	.736	.129	.538
相手の性格がわかる	.066	.652	.106	.599
人をうまく説得できる	.018	.525	.254	.525
第III因子 コミュニケーション ($\alpha=.614$)				
進んで人と関わる	-.038	-.077	.724	.432
コミュニケーション技術が上がる	.219	.154	.502	.608
回転後の負荷量平方和	6.008	5.357	3.792	
因子間相関行列				
	第II因子	.747	—	
	第III因子	.632	.615	—

Table2 社会福祉学への期待の因子分析結果 (高校生) (N = 300)

質問項目	I	II	共通性
第I因子 弱者支援と社会貢献 ($\alpha=.916$)			
子どもや高齢者に優しく接する	.906	-.124	.673
障害者を差別しない	.879	-.156	.597
弱い人の味方になれる	.854	-.037	.685
ボランティア活動で役に立つ	.696	-.011	.474
コミュニケーション技術が上がる	.662	.074	.515
世の中の役に立つことができる	.659	.041	.476
進んで人と関わる	.658	.100	.539
人の心のケアができる	.548	.291	.618
社会で抱えている問題を理解しやすくなる	.504	.209	.451
第II因子 人間理解と相談 ($\alpha=.837$)			
カウンセリングができるようになる	-.076	.731	.459
人間を深く知ることができる	.108	.687	.591
調査データなどに基づいて考えることができる	-.183	.668	.302
人をうまく説得できる	.021	.611	.392
人の心を理解し、アドバイスをすることができる	.239	.581	.598
人の悩みを解決することができる	.296	.516	.576
回転後の負荷量平方和	6.723	5.671	
因子間相関行列			
	第II因子	.730	—

あり、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から3因子構造が妥当であると考えられた。福祉職への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 9.600, 4.674, 1.308, 1.073, 1.058, 0.995 \dots$ であり固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から3因子構造が妥当であると考えられた。

因子負荷量の基準を絶対値.400とし、因子負荷量が基準に満たない項目および複数の項目に高い負荷量を示す項目を分析から除外し、因子数を指定した因子分析を繰り返し行った。

その結果、心理職のイメージの第I因子は、「人と向き合う仕事である」、「人とのつながりが必要な仕事である」、「信頼関係の構築が必要な仕事である」など、伊原・三保(2014)の「対人関係」を構成する項目や、「問題解決が求められる仕事である」、「緻密さが求められる仕事である」、「専門性が高い仕事である」、といった、伊原・三保(2014)の「専門性」を構成する項目が高い負荷量を示していた。対人関係は対人援助職の仕事の基盤でありいちばんの特徴であるため、本研究では、第I因子を「専門性」と命名した。

Table3 心理職のイメージの因子分析結果 (高校生) (N = 300)

項目	I	II	III	共通性
第I因子 専門性 ($\alpha=.902$)				
人と向き合う仕事である	.879	-.151	-.021	.690
人とのつながりが必要な仕事である	.877	-.090	.022	.706
信頼関係の構築が必要な仕事である	.805	-.036	-.025	.630
親密に話す機会が多い仕事である	.790	-.009	.032	.615
問題解決が求められる仕事である	.727	-.046	.111	.497
能力が活かせる仕事である	.630	.051	.140	.437
緻密さが求められる仕事である	.628	.045	.010	.419
専門性が高い仕事である	.608	.134	.010	.456
正確性が求められる仕事である	.467	.103	.061	.273
第II因子 社会的評価・労働条件・自己価値 ($\alpha=.849$)				
社会的権威がある仕事である	-.158	.748	-.052	.455
安定した収入が得られる仕事である	-.048	.690	.087	.506
正社員での雇用が多い仕事である	-.083	.630	.085	.410
世間からの評価が高い仕事である	.161	.609	.062	.511
他人から尊敬される仕事である	.285	.598	-.208	.539
働く人の可能性が広がる仕事である	.121	.524	-.038	.329
成長できそうな仕事である	.346	.466	-.127	.451
高い報酬が得られる仕事である	.003	.460	.323	.434
社会的ニーズが高い仕事である	.312	.441	-.093	.389
第III因子 職務負担の軽さ ($\alpha=.704$)				
休日を取りやすい仕事である	.159	-.044	.676	.437
身体的な負担が少ない仕事である	.220	-.144	.642	.358
精神的な負担が少ない仕事である	-.236	.155	.607	.515
勤務時間が規則的である	-.069	.322	.431	.389
回転後の負荷量平方和	5.990	4.827	2.258	
因子間相関行列				
	第II因子	.423	—	
	第III因子	-.084	.390	—

第Ⅱ因子には、伊原・三保 (2014) の「社会的評価」、「労働条件」、「自己価値」の因子を構成する項目がまとまり、高い負荷量を示したため、「社会的評価・労働条件・自己価値」と命名した。第Ⅲ因子は、伊原・三保 (2014) の「労働条件」と、石川他 (2018) から用いた身体的負担と精神的負担に関する項目が高い負荷量を示していた。これらの項目は働く人にとっての負担に関わる内容であるため、「職務負担の軽さ」と命名した。各因子の α 係数は、第Ⅰ因子で $\alpha = .902$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .849$ 、第Ⅲ因子で $\alpha = .704$ であった (Table3)。

また、福祉職のイメージの第Ⅰ因子は、「親密に話す機会が多い仕事である」、「人と向き合う仕事である」、「信頼関係の構築が必要な仕事である」など、対人関係に関する項目や、「正確性が求められる仕事である」、「緻密さが求められる仕事である」、「問題解決が求められる仕事である」といった専門性に関する項目が高い負荷量を示しており、これは心理職と同じ傾向であった。一方、「社会貢献度の高い仕事である」、「社会的ニーズが高

Table4 福祉職のイメージの因子分析結果 (高校生) (N = 300)

項目	I	II	III	共通性
第Ⅰ因子 専門性 ($\alpha = .909$)				
親密に話す機会が多い仕事である	.806	-.025	-.042	.622
人と向き合う仕事である	.802	-.135	-.118	.622
社会貢献度の高い仕事である	.776	-.042	-.002	.616
信頼関係の構築が必要な仕事である	.766	-.033	.006	.604
人とのつながりが必要な仕事である	.751	-.157	.079	.706
正確性が求められる仕事である	.707	.177	-.041	.441
緻密さが求められる仕事である	.695	.180	-.089	.390
問題解決が求められる仕事である	.638	.164	-.040	.358
社会的ニーズが高い仕事である	.617	-.170	.064	.497
身近な地域にあるため、希望地域で働ける仕事である	.551	.213	-.015	.288
取得した資格が活かせる仕事である	.479	-.061	.256	.443
第Ⅱ因子 職務負担の軽さ ($\alpha = .798$)				
身体的な負担が少ない仕事である	.123	.862	-.168	.629
精神的な負担が少ない仕事である	-.091	.695	.117	.569
高い報酬が得られる仕事である	.121	.688	.163	.571
人との関わりが薄い仕事である	-.047	.646	-.126	.405
勤務時間が規則的である	.177	.492	.124	.314
第Ⅲ因子 自己価値・社会的評価・労働条件 ($\alpha = .867$)				
働く人の可能性が広がる仕事である	-.015	-.040	.790	.593
私生活との両立が可能な仕事である	-.182	.227	.551	.367
やりがいが見いだせる仕事である	.359	-.064	.540	.637
成長できそうな仕事である	.348	-.044	.538	.620
個性が活かせる仕事である	.045	.210	.515	.400
世間からの評価が高い仕事である	.174	.065	.480	.375
他人から尊敬される仕事である	.329	.011	.461	.497
能力が活かせる仕事である	.349	-.009	.460	.517
休日を取りやすい仕事である	-.248	.360	.455	.406
安定した収入が得られる仕事である	.080	.369	.428	.449
回転後の負荷量平方和	7.696	3.672	6.301	
因子間相関行列				
	第Ⅱ因子	-.212	—	
	第Ⅲ因子	.575	.306	—

い仕事である」、「身近な地域にあるため、希望地域で働ける仕事である」、「取得した資格が活かせる仕事である」といった項目は心理職の「専門性」のイメージとしては含まれていなかった。これらはすべて福祉職の専門性と解釈され、第Ⅰ因子を「専門性」と命名した。第Ⅱ因子は、心理職のイメージの第Ⅲ因子とほぼ同じ項目が高い負荷量を示しており、「職務負担の軽さ」と命名した。「人との関わりが薄い仕事である」については、伊原・三保(2014)では「人間関係」因子の逆転項目となっているが、本研究では、人と深く関わるのが職務上の負担として捉えられたと推測される。第Ⅲ因子は、伊原・三保(2014)の「自己価値」、「社会的評価」、「労働条件」の因子を構成する項目がまとまり高い負荷量を示したため、「自己価値・社会的評価・労働条件」と命名した。各因子の α 係数は、第Ⅰ因子で $\alpha = .909$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .798$ 、第Ⅲ因子で $\alpha = .867$ であった (Table4)。

高校生における学問への期待および職業イメージの下位尺度得点の記述統計量を算出し、Table5に示した。なお、各下位尺度得点は、下位尺度を構成する項目得点の和を項目数で除したものとした。

Table5 学問への期待と職業のイメージの下位尺度得点の記述統計量 (高校生) (N = 300)

	心理学への期待			社会福祉学への期待		心理職のイメージ			福祉職のイメージ		
	I.心の理解とケア	II.心理的洞察	III.コミュニケーション	I.弱者支援と社会貢献	II.人間理解と相談	I.専門性	II.社会的評価・労働条件・自己価値	III.職務負担の軽さ	I.専門性	II.職務の負担の軽さ	III.自己価値・社会的評価・労働条件
M	3.81	3.40	3.44	3.72	3.35	4.55	3.56	3.01	4.48	2.55	3.68
(SD)	(0.91)	(0.96)	(0.96)	(0.85)	(0.79)	(0.94)	(0.87)	(0.95)	(0.94)	(1.02)	(0.88)
最小値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.44	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	6.00	5.78	6.00	6.00	6.00	6.00

3. 保護者における心理学・社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージの構造

保護者における心理と福祉に関する学問への期待と職業のイメージの構造を検討するために、探索的因子分析を行った。

心理学と社会福祉学への期待に関するそれぞれの項目群に対して、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その結果、心理学への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 8.716, 1.208, 0.916, 0.685, 0.557 \dots$ であり、Kaiser-Guttman基準および因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると考えられた。社会福祉学への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 8.520, 1.760, 0.773, 0.745, 0.577 \dots$ であり、Kaiser-Guttman基準、固有値の減衰状況、および因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると考えられた。

因子負荷量の基準を絶対値 .400とし、因子負荷量が基準に満たない項目および複数の項目に高い負荷量を示す項目を分析から除外し、因子数を指定した因子分析を繰り返した。

その結果、心理学への期待の第Ⅰ因子は「人の心のケアができる」、「他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる」、といったように、心のケアや心の理解に関する項目が高い負荷量を示した。これは高校生の第Ⅰ因子とほぼ同じ項目群であり、「心の理解とケ

ア」と命名した。ただし、「実験データなどに基づいて考えることができる」という項目は、高校生ではいずれの因子にも高い負荷量を示さなかったが、保護者においては、データに基づいた理解は、心理学の方法論のひとつとして知られていることが伺えた。第Ⅱ因子は、高校生の第Ⅱ因子と第Ⅲ因子が合わさったような項目内容であり、「心理的洞察とコミュニケーション」と命名した。各因子の α 係数は、第Ⅰ因子で $\alpha = .913$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .897$ であった (Table6)。

社会福祉学への期待の第Ⅰ因子には、「人をうまく説得できる」、「カウンセリングができるようになる」、「人の悩みを解決することができる」といった項目が高い負荷量を示していた。高校生の第Ⅱ因子と類似した項目構成であり、「人間理解と相談」と命名した。第Ⅱ因子は、「ボランティア活動で役に立つ」、「子どもや高齢者に優しく接する」、「世の中の役に立つことができる」などの項目が高い負荷量を示していた。高校生の第Ⅰ因子と類似した項目構成であり、「弱者支援と社会貢献」と命名した。各因子の α 係数は、第Ⅰ因子で $\alpha = .927$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .911$ であった (Table7)。

心理職と福祉職に対するイメージについても、それぞれの項目群に対して、探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。その結果、心理職のイメージにおいては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 11.432, 3.433, 1.392, 1.159, 0.958, 0.866 \dots$ であり、Kaiser-Guttman 基準、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から4因子構造が妥当であると考えられた。福祉職への期待においては、初期の固有値は、第1固有値より $\lambda = 10.756, 4.884, 1.509, 1.243, 1.002, 0.858 \dots$ であり固有値の減衰状況および

Table6 心理学への期待の因子分析結果 (保護者) (N = 300)

質問項目	I	II	共通性
第Ⅰ因子 心の理解とケア ($\alpha = .913$)			
人の心のケアができる	.874	-.010	.751
他の人たちの持つ精神的問題を理解しやすくなる	.834	-.060	.625
人の心を理解し、アドバイスをすることができる	.815	.066	.749
カウンセリングができるようになる	.804	-.027	.614
教育場で役に立つ	.699	.082	.580
人間を深く知ることができる	.654	.154	.602
実験データなどに基づいて考えることができる	.535	.070	.347
第Ⅱ因子 心理的洞察とコミュニケーション ($\alpha = .897$)			
人の考えていることが読めるようになる	-.117	.852	.591
次に相手がどう行動するかがわかるようになる	-.047	.840	.649
いやな相手とも上手く付き合えるようになる	.026	.724	.552
人をうまく説得できる	.170	.632	.590
相手の性格がわかる	.152	.626	.558
コミュニケーション技術が上がる	.295	.446	.483
進んで人と関わる	.126	.441	.294
心の問題を見抜くことができるようになる	.387	.433	.589
回転後の負荷量平方和	7.086	6.682	
因子間相関行列			
	第Ⅱ因子	.748	—

Table7 社会福祉学への期待の因子分析結果 (保護者) (N = 300)

質問項目	I	II	共通性
第I因子 人間理解と相談 ($\alpha=.927$)			
人をうまく説得できる	.884	-.187	.599
カウンセリングができるようになる	.835	-.084	.611
人の悩みを解決することができる	.817	-.035	.631
人の心を理解し、アドバイスをすることができる	.810	.034	.693
人の心のケアができる	.714	.138	.658
コミュニケーション技術が上がる	.692	.124	.608
いやな相手とも上手く付き合えるようになる	.660	.095	.527
人間を深く知ることができる	.638	.172	.582
進んで人と関わる	.489	.256	.469
第II因子 弱者支援と社会貢献 ($\alpha=.911$)			
ボランティア活動で役に立つ	-.075	.875	.685
子どもや高齢者に優しく接する	-.017	.870	.738
世の中の役に立つことができる	-.081	.854	.645
障害者を差別しない	.041	.767	.631
弱い人の味方になれる	.122	.710	.633
社会で抱えている問題を理解しやすくなる	.106	.638	.508
回転後の負荷量平方和	6.988	6.433	
因子間相関行列			
	第II因子	.658	—

因子の解釈可能性から4因子構造が妥当であると考えられた。

因子負荷量の基準を絶対値 .400 とし、因子負荷量が基準に満たない項目および複数の項目に高い負荷量を示す項目を分析から除外し、因子数を指定した因子分析を繰り返し行った。

その結果、心理職のイメージの第I因子は、「人と向き合う仕事である」、「信頼関係の構築が必要な仕事である」、「人とつながりが必要な仕事である」など、伊原・三保(2014)の「対人関係」を構成する項目や、「専門性が高い仕事である」、「問題解決が求められる仕事である」といった、伊原・三保(2014)の「専門性」を構成する項目が高い負荷量を示していた。これは、高校生の第I因子と同じ因子であると考えられ、因子名も同様に「専門性」と命名した。第II因子には、伊原・三保(2014)の「自己価値」と「社会的評価」に相当する項目が高い負荷量を示したため、「自己価値・社会的評価」と命名した。第III因子は、伊原・三保(2014)の「労働条件」と、石川他(2018)から用いた身体的負担と精神的負担に関する項目が高い負荷量を示していた。これは高校生の第II因子と同じ因子であると考えられ、因子名も同様に「職務負担の軽さ」と命名した。第IV因子には、「高い報酬が得られる仕事である」、「安定した収入が得られる仕事である」、「正社員での雇用が多い仕事である」の3項目が高い負荷量を示した。これらの項目は労働条件の中でも特に収入や雇用に関する内容であるため、「収入と雇用」と命名した。各因子の α 係数は、第I因子で $\alpha = .890$ 、第II因子で $\alpha = .916$ 、第III因子で $\alpha = .753$ 、第IV因子で $\alpha = .792$ であった (Table8)。

また、福祉職のイメージの第Ⅰ因子には、「人と向き合う仕事である」、「人とのつながりが必要な仕事である」、「信頼関係の構築が必要な仕事である」といった対人関係に関する項目が高い負荷量を示したことに加え、「社会的ニーズが高い仕事である」、「社会貢献度の高い仕事である」、「身近な地域にあるため、希望地域で働ける仕事である」といった項目も高い負荷量を示した。これは高校生の第Ⅰ因子と同様の因子と考えられ、「専門性」と命名した。第Ⅱ因子は、伊原・三保(2014)の「社会的評価」、「自己価値」に相当する項目が高い負荷量を示したため、「社会的評価・自己価値」と命名した。第Ⅲ因子は心理職の第Ⅲ因子と同じ項目が高い負荷量を示しており、同様に「職務負担の軽さ」と命名した。第Ⅳ因子は、「正確性が求められる仕事である」、「緻密さが求められる仕事である」、「問題解決が求められる仕事である」の3項目が高い負荷量を示していた。これらの項目

Table8 心理職のイメージの因子分析結果 (保護者) (N = 300)

質問項目	I	II	III	IV	共通性
第Ⅰ因子 専門性 (α=.890)					
人と向き合う仕事である	.869	-.162	.053	.029	.601
信頼関係の構築が必要な仕事である	.869	-.008	.009	-.140	.672
人とのつながりが必要な仕事である	.754	.096	-.009	-.056	.642
親密に話す機会が多い仕事である	.708	.050	.002	.005	.556
専門性が高い仕事である	.699	.097	-.067	.072	.636
問題解決が求められる仕事である	.684	-.041	.068	.121	.515
緻密さが求められる仕事である	.544	.098	.007	.144	.479
正確性が求められる仕事である	.529	.024	.115	.171	.438
人との関わりが薄い仕事である (R)	-.420	-.015	.243	.149	.233
第Ⅱ因子 自己価値・社会的評価 (α=.916)					
やりがいが見いだせる仕事である	.047	.836	.015	-.108	.666
成長できそうな仕事である	.008	.753	-.047	.086	.629
働く人の可能性が広がる仕事である	-.091	.724	.123	.056	.582
他人から尊敬される仕事である	-.050	.720	-.117	.191	.589
個性が活かせる仕事である	-.082	.654	.056	-.020	.378
取得した資格が活かせる仕事である	.157	.606	-.102	.142	.609
社会的ニーズが高い仕事である	.228	.582	-.049	-.032	.529
能力が活かせる仕事である	.238	.558	.031	-.004	.566
社会貢献度の高い仕事である	.330	.546	-.026	-.040	.612
第Ⅲ因子 職務負担の軽さ (α=.753)					
休日が取りやすい仕事である	-.008	.160	.803	-.162	.665
勤務時間が規則的である	.037	.039	.665	-.017	.460
私生活との両立が可能な仕事である	.058	.320	.543	-.046	.536
身体的な負担が少ない仕事である	.111	-.231	.534	.155	.280
精神的な負担が少ない仕事である	-.264	-.107	.449	.192	.317
第Ⅳ因子 収入と雇用 (α=.792)					
高い報酬が得られる仕事である	.028	.010	.091	.764	.675
安定した収入が得られる仕事である	.023	.192	-.024	.659	.623
正社員での雇用が多い仕事である	-.012	.313	.012	.434	.445
回転後の負荷量平方和					
	8.019	8.8745	3.2878	4.899	
因子間相関行列					
	第Ⅱ因子	—			
	第Ⅲ因子	.040	—		
	第Ⅳ因子	.386	.592	—	

は、伊原・三保 (2014) の「専門性」に相当する項目の中でも特に確実に職務を遂行することへの期待に関わる因子であると解釈し、「確実な職務遂行」と命名した。各因子の α 係数は、第 I 因子で $\alpha = .907$ 、第 II 因子で $\alpha = .896$ 、第 III 因子で $\alpha = .821$ 、第 IV 因子で $\alpha = .817$ であった (Table9)。

保護者における学問への期待および職業イメージの下位尺度得点の記述統計量を算出

Table9 福祉職のイメージの因子分析結果 (保護者) (N = 300)

質問項目	I	II	III	IV	共通性
第 I 因子 専門性 ($\alpha=.907$)					
人と向き合う仕事である	.935	-.211	.057	.102	.767
人とのつながりが必要な仕事である	.867	-.183	.073	.153	.718
信頼関係の構築が必要な仕事である	.775	-.080	.044	.232	.738
親密に話す機会が多い仕事である	.684	-.060	-.003	.250	.635
社会的ニーズが高い仕事である	.658	.268	-.192	-.096	.642
社会貢献度の高い仕事である	.599	.307	-.193	-.024	.641
身近な地域にあるため、希望地域で働ける仕事である	.496	.207	.036	-.182	.326
第 II 因子 社会的評価・自己価値 ($\alpha=.896$)					
他人から尊敬される仕事である	-.076	.809	-.193	.171	.625
世間からの評価が高い仕事である	-.004	.780	.092	-.007	.670
社会的権威がある仕事である	-.205	.766	.043	.095	.536
成長できそうな仕事である	.266	.589	.109	-.029	.635
働く人の可能性が広がる仕事である	.066	.586	.152	.097	.552
能力が活かせる仕事である	.124	.585	-.080	.184	.551
個性が活かせる仕事である	-.200	.484	.114	.287	.377
やりがいが見いだせる仕事である	.357	.479	.027	-.084	.503
正社員での雇用が多い仕事である	.247	.438	.262	-.191	.450
第 III 因子 職務負担の軽さ ($\alpha=.821$)					
休日を取りやすい仕事である	.056	.021	.798	-.024	.648
勤務時間が規則的である	.055	-.014	.754	.017	.559
身体的な負担が少ない仕事である	-.235	.086	.637	.115	.513
精神的な負担が少ない仕事である	-.330	-.010	.603	.049	.486
私生活との両立が可能な仕事である	.258	.085	.593	-.129	.444
第 IV 因子 確実な職務遂行 ($\alpha=.817$)					
正確性が求められる仕事である	.120	.147	-.043	.706	.714
緻密さが求められる仕事である	.294	.124	.015	.548	.651
問題解決が求められる仕事である	.223	.124	.071	.475	.482
回転後の負荷量平方和					
	7.114	7.163	3.504	4.119	
因子間相関行列					
	第 II 因子	—			
	第 III 因子	-.062	.424	—	
	第 IV 因子	.464	.420	.042	—

Table10 学問への期待と職業のイメージの下位尺度得点の記述統計量 (保護者) (N = 300)

	心理学への期待		社会福祉学への期待		心理職のイメージ				福祉職のイメージ			
	I. 心の理解とケア	II. 心理的洞察とコミュニケーション	I. 人間理解	II. 弱者支援と社会貢献	I. 専門性	II. 自己価値・社会的評価	III. 職務負担の軽さ	IV. 収入と雇用	I. 専門性	II. 社会的評価・自己価値	III. 職務負担の軽さ	IV. 確実な職務遂行
M	3.53	3.22	3.12	3.58	4.50	3.94	2.91	3.36	4.59	3.71	2.62	4.15
(SD)	(0.78)	(0.73)	(0.71)	(0.78)	(0.78)	(0.79)	(0.75)	(0.89)	(0.85)	(0.79)	(0.83)	(0.90)
最小値	1.00	1.00	1.00	1.00	2.00	1.00	1.00	1.00	1.71	1.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	5.00	5.00	6.00	5.78	5.60	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00

し、Table10に示した。なお、各下位尺度得点は、下位尺度を構成する項目得点の和を項目数で除したものとした。

考察

1. 心理学・社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージについて

本研究では、高校生とその保護者における心理学や社会福祉学への期待、また心理職や福祉職に対するイメージの因子構造について検討を行った。心理学への期待は、高校生では「心の理解とケア」、「心理的洞察」、「コミュニケーション」の3因子、保護者では「心の理解とケア」、「心理的洞察とコミュニケーション」の2因子構造であった。ここで、「心の理解とケア」は、心のケアや心の問題の理解と解決など、主に心理の専門職として期待される事柄と解釈できる。一方、「心理的洞察」や「コミュニケーション」は、相手がどのような人であるかの理解や、コミュニケーション技術に関する因子であり、人との関わり一般において期待される事柄と考えられる。保護者において「心理的洞察とコミュニケーション」は一因子にまとまったのに対して、高校生において「心理的洞察」と「コミュニケーション」は別の因子であった。高校生にとって「コミュニケーション」は特段関心の高い事柄であると推察され、他の因子との相関は比較的高いものの、別次元として捉えられているものと考えられる。

社会福祉学への期待は、高校生では「弱者支援と社会貢献」、「人間理解と相談」の2因子、保護者でも「人間理解と相談」、「弱者支援と社会貢献」の2因子であった。因子に高い負荷量を示す項目は一部異なるが、概ね同一の概念とみなせると考えられる。このうち、「人間理解と相談」は社会福祉の専門職に求められる態度・行動である。「弱者支援と社会貢献」は、社会において弱者とされがちな人を尊重し、支援し、社会の役に立つという内容である。社会的弱者の力になることは、福祉専門職の価値基盤として重視される人権の尊重や社会正義にも通じ、社会福祉学を学ぶことによって専門職としての価値観が培われるという期待がうかがえる。以上のことから、心理学、社会福祉学への期待は、高校生と保護者で類似しており、それぞれの専門職への期待と関わりが深い事柄と考えられる。

職業のイメージについては、高校生と保護者のそれぞれに特徴が見られた。高校生においては、心理職のイメージは「専門性」、「社会的評価・労働条件・自己価値」、「職務負担の軽さ」の3因子、福祉職のイメージは「専門性」、「職務負担の軽さ」、「自己価値・社会的評価・労働条件」の3因子であり、類似した構造が確認された。「専門性」の因子には、心理職・福祉職ともに、人と関わり、人との信頼関係を基盤とした対人援助職の特徴が含まれていた。しかし、心理職と福祉職で同一の質問項目を使用したにもかかわらず、福祉職においてのみ「専門性」の因子に、社会貢献度が高い、社会的ニーズが高い、身近な地域にあるため希望地域で働ける、といった社会・地域とのつながりに関する項目が含まれていた点に特徴がみられた。また、福祉職においては、「職務負担の軽さ」の因子に、「人との関わりが薄い仕事である」や「高い報酬が得られる仕事である」が高い負荷量を示し

た。これらは心理職には見られなかった項目である。これらの項目は、裏を返せば、福祉職においては、人と深く関わることの負担や、仕事に見合う高い報酬が得られにくいことの負担が認識されているとも解釈できるのではないだろうか。

保護者においては、心理職のイメージは「専門性」、「自己価値・社会的評価」、「職務負担の軽さ」、「収入と雇用」の4因子、福祉職のイメージは「専門性」、「自己価値・社会的評価」、「職務負担の軽さ」、「確実な職務遂行」の4因子構造であった。「専門性」の因子については、高校生の結果と同様に、心理職と福祉職のイメージの違いが見られた。また、保護者は高校生よりも因子数が多かったが、心理職において、高校生は「社会的評価・労働条件・自己価値」がひとつの因子であることに対して、保護者は、労働条件の中でも「収入と雇用」に関する項目が別の次元で捉えられていることが示された。雇用や収入は、高校生よりも保護者の注目するところであるかもしれない。また、福祉職においては、高校生では「専門性」の因子に含まれていた問題解決能力に関する項目が、保護者では独立した因子として捉えられているという違いがみられた。

以上のように、心理職、福祉職への期待は、高校生と保護者とで因子数が異なっており、保護者のほうが、職業に対して多くの次元から捉えている可能性が示された。これは、社会経験の差に起因することが考えられる。また、高校生においては、職業に関して、興味関心などの自己価値、社会的評価、労働条件が関連して捉えられている可能性が示された。

各尺度の下位尺度得点の平均値について回答が完全にランダムであった場合の平均値である3.5を基準として考えると、高校生においては、心理職や福祉職は専門性の高い職業であるというイメージが強いこと、福祉職において職務負担の重い職業というイメージがあることがうかがえた。心理職の職務負担については、福祉職ほどではないが、やや負担の重い職業であるというイメージと解釈される。保護者においては高校生と同様の傾向であることに加え、福祉職の「確実な職務遂行」のイメージも強いことが示された。

2. 課題と今後の展望

本研究では、高校生における心理学・社会福祉学への期待と、心理職・福祉職のイメージを明らかにし、保護者との比較を行った。今後は、さらに本調査結果の分析を進めるとともに、心理学・心理職と福祉学・福祉職という抽象的なレベルにとどまらず、カウンセラー、ソーシャルワーカーなど、具体的な仕事についての高校生の認識を把握していくことも必要である。

心理学・社会福祉学は、多くの高校生にとって学習したことがなく、きわめて広範な学問領域といえる。学校生活で身近に関わってきた教育職（教員）などとは違い、心理職・福祉職についている人が身近にいないことも多いため、どのような職場でどんな業務に就いているか、十分な情報を持っていないことが多いと考えられる。また、福祉の仕事という場合に高齢者の介護が代表的なものとして思い浮かびやすく、ソーシャルワーカーによ

る相談業務は、あまり知られていないであろう。

専門職養成教育を行う上で、学問領域や職業についての正確な情報を、大学等から高校生に様々な機会に提供していくことは、意義あることと考えられる。また大学の授業において、入学した学生たちに学問領域としてのおもしろさ、職業に活かす上でのやりがいや困難さなどを伝えることも教育における課題と考える。

今回は筆者らが大学で携わる専門職養成教育における関心から、対人援助職の中でも心理学・社会福祉学のみをとりあげたが、高校生の進路は幅広く、他の学問領域との比較も課題となろう。また、進路選択には、学問への期待や職業への興味のみならず、学力、地域、経済的要因など様々な要因が関与しており、これらも視野に入れた研究が必要と考える。

注

本研究は2019年度学内学術研究振興費を受けて実施された。

引用文献

- 林 郷子・村上 史朗・三沢 良 [2018]「高校生が抱く心理学への期待観」日本心理学会第82回大会発表論文集 929.
- 林 郷子・村上 史朗・三沢 良 [2019]「高校生が抱く心理学への期待観——心理学科に在籍する大学生との比較を通して——」奈良大学紀要, 47, 79-92.
- 伊原 千晶・三保 紀裕 [2014]「薬剤師イメージの測定と尺度構成——文系私立大学生を対象とした検討——」人間文化研究 (京都学園大学人間文化学会紀要), (32), 27-49.
- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・リクルートマーケティングパートナーズ [2020]「第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査2019年報告書」Retrieved from http://souken.shingakunet.com/research/2019_hogosya4.pdf (2020年10月27日)
- 石川 久展・大和 三重・胡 宝奇 [2018]「高校生の福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態——兵庫県の高校生に対する実態調査の結果をもとに——」Human welfare : HW (関西学院大学人間福祉学部研究会), 10, 57-65.
- 岩崎 智史・大橋 恵・皆川 順 [2012]「心理学に対するイメージ (1) ——心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究——」東京未来大学研究紀要, 5, 1-9.
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真 [2019]「調査回答の質の向上のための方法の比較」心理学研究, 90, 463-472.
- 才口 貴子・谷井 淳一 [2010]「臨床心理士のイメージと相談したいと思う程度の関連」日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 548.
- 坂井 圭介・坂野 悦子・河野 理恵 [2008]「新入生の福祉職のイメージとその要因」目白大学総合科学研究, 4, 107-117.
- 谷口 (藤本) 麻起子・金網 知征 [2012]「心理学に対する期待及び大学の専攻動機の変化過程に関する調査研究」聖泉論叢, 20, 1-10.
- 植田 佳世・丹野 眞智俊 [2007]「スクールカウンセラーへのイメージについての調査研究——大学生・高校生への調査の比較から——」神戸親和女子大学大学院研究紀要, 3, 57-63.
- 吉本 早苗・長谷川 有香・首藤 祐介・山本 竜也・川島 大輔・小島 康生 [2017]「心理学を学ぶ学生に関するイメージ調査 (1) ——高校生の親を対象としたオンライン調査研究——」中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 17, 81-85.